# 郷友会形成母村の研究

## ——鹿児島県瀬戸内町の場合——

田島康弘

(1988年10月15日　受理)

# A Study of Mother Village Whose People Organize an Association in Urban Area

## —— A Case Study of Setouchi-cho, Kagoshima Prefecture ——

Yasuhiro TAJIMA

## 第1章　研究目的

郷友会[1]とは，主に都市部に於て郷土すなわち出身地を同じくする者同士が形成する会のことである。この場合，出身地の範囲の広狭が一つの問題となるだろう。最も代表的・展型的なものは集落[2]レベルの郷友会であると筆者は考えているが，この他に校区レベルのものを最も基礎的な（最小の）郷友会とするものもあり，市町村レベルのものが最少の場合もある。また，他方，市町村レベルのものの中には，集落レベルの郷友会の連合体的性格のものも少なくなく，島単位の郷友会[3]も同じく連合体的性格が強い。さらに広範囲なものとしては県人会[4]ということになるが，この県人会を郷友会の中に含めるべきかどうかはかなり疑問であろう。それは，郷友会が主として親睦を中心として形成されているのに対し，県人会となると，もっぱら連合体的側面が強くなり，質的に異なるように思われるからである。しかし，連合体であるということは，一線を画すような全く別のものであるとも言えないだろう。筆者としては，集落レベル，校区レベル，市町村レベルぐらいまでのものを郷友会と呼ぶことにしておきたい[5]。なお，奄美の場合は，市町村連合の上に島単位のものとして，徳州会と沖州会とがあり，これらも含めた奄美全体の組織として奄美会[6]があって，これが鹿児島県人会に加盟するという形をとっている。

第2の問題は，全国に存在する様々な集落や市町村の中で，どういう場合にその出身者がこうした会を形成するのか，すなわち郷友会の成立条件とでも言うべきことの検討である。一般に，こうした会は，山村や離島出身者に多いと言われており，山村では，四国山地[7]，北陸山村[8]などの報告がなされているが，他の山村では寡聞にしてその例をあまり聞かない。また，離島においては奄美[9]，沖縄[10]，瀬戸内海[11]等での報告があり，筆者も甑島における事例を報告したことがある[12]が，

鹿児島大学教育学部社会科

全国一離島の数が多いといわれる長崎県やその他の諸県では，あまりその例を聞かない。さらに，同じ南西諸島でも奄美と沖縄とでは，その形態はかなり異なるように思う[13]。

第3の問題点は，こうして成立した郷友会の強弱の背景なり原因なりの問題である。奄美の郷友会は，一般に関西を中心として，関東，福岡，鹿児島，沖縄，名瀬などで形成され，これらの地域の中で，様々な強弱をもつ郷友会が存在しており，その強弱の程度も不変ではなく，活動の浮き沈みもあると言われている。郷友会のこうした強弱を左右する要素の一つにすぐれたリーダーの存在の有無があげられており，こうした要素が無視できないことはたしかであろう。しかし，こうした主体的要素の他に，客体的要素が大きな意味をもつこともたしかだろう。その一つは出身母村の経済的事情である。一般に農業を基盤とする集落の出身者よりも漁業を基盤とする漁村の出身者の方が結合力は強いようである。とくに漁村出身者の場合，婦人部の力が強いとも言われる。客体的要素のもう一つは，出身地域の歴史的背景あるいは風土とでも言うべきことである。奄美の場合長い間，琉球王朝や島津氏の支配下にあり，戦後も一時期アメリカの占領下にあったことなどが，奄美の人々の結集の背景にある一要素として検討されるべき課題であろう。以上の様な出身地の諸条件の他に，郷友会形成地の特色も全く無関係だとは言えないように思う。関東と比べて関西で郷友会活動が活発であるのは，郷友会の歴史の古さや人数の多さと並んでその形成地の地域性が関係しているように思われてならない。

以上の様にみてくると，郷友会という現象は現代史の中における一つの社会的・経済的・地域的現象であって，その研究は以上の諸方面，諸学から総合的に解明されるべき問題性をもつ研究対象であると言えるように思う。さらに，こうした「結集」あるいは「まとまり」の現象は，日本人の特色として海外においてよく言われることでもあり，こうした意味では，日本人論へもつながる問題であって，逆に言うと，日本人の存在状態を解明する一つの手掛りを与えている研究対象であるとも言えるように思う。

郷友会に関る研究動向を見ると，地理学分野では四国を扱った篠原，瀬戸内を扱った岡橋のものがある。しかし，社会学分野において研究はより活発であり，松本通晴の一連の研究，上智大学安斎伸グループの西阿室郷愛会の研究，沖縄の郷友会を対象とした石原昌家の研究などがあげられよう。この他，奄美の場合，出身者自らが自分達の状況や活動を整理したり，まとめたりすることがなされてきていることも無視できない[14]。以上の様に研究が進展してはいるが，全体として郷友会の研究はまだ始まったばかりであり，その実態すらまだ十分に把握されておらず，解明すべき多くの問題や課題が残されている状況であると言えよう。

考えてみると，都市部における類似の現象は segregation として欧米の諸都市において報告があり，エジプト等においても，カイロにおける同郷者の集住についての報告[15]などもあって，こうした現象は国際間あるいは一国内の都市・農村間の国際的現象のようである。しかし，本研究では日本，その中でもとくに奄美を研究対象としている。この場合の研究の枠組みとして次の3つが考えられよう。第1は奄美の郷友会をめぐる全体的動向（全体像）の把握であり，第2は個別の集落

レベルの母村の側からの研究であり，第3は関西等の郷友会形成地である都市部の側からの研究である。筆者は現在，これらを並行して進めているが，本報告ではこの中で第2の母村の研究の一例を紹介したい。

以上の事から，本報告では，奄美の中でも人口流出，過疎化の最も著しい瀬戸内町を対象とし，その中でも特に減少の著しい旧実久村地区を選定して，1)人口の流出過程，2)残された集落（郷友会形成母村）の実態を明らかにすることを目的とする。

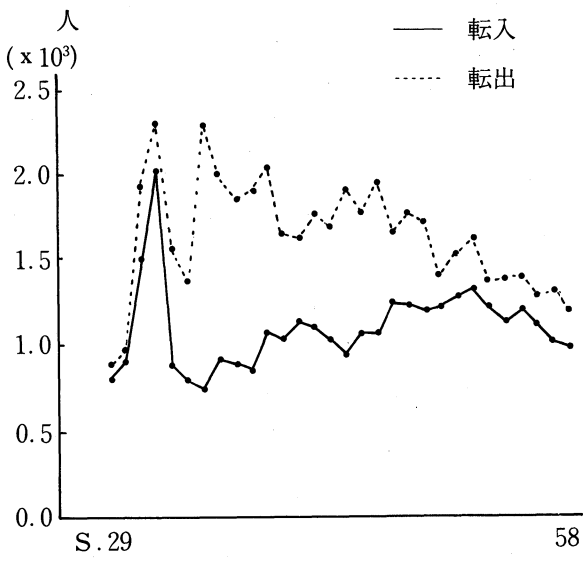
この目的を明らかにするための方法として，1)既存の統計の整理，2)主要な intormant（情報提供者）からの資料収集や聴き取りの整理，3)3集落の全戸を対象として行なったアンケート調査などによった。以上が第2章，第3章，第4章の各章にそれぞれ相当する。現地調査は1988年7月9日から15日にかけて瀬戸内町で行った。調査は，筆者を含めて教官2名，学生9名，合計11名で行った。以下はその結果である。

## 第2章　瀬戸内町の人口動態（人口流出過程）— 郷友会形成の基礎条件 —

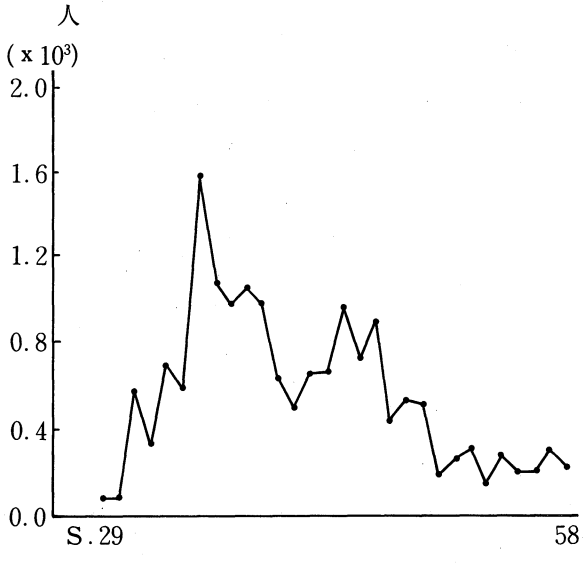
### 第1節　転出期，転出先，転出理由など

本章では，官庁統計を中心とした既存のデータを使用して，瀬戸内町をめぐる人口流出過程やその特徴等を明らかにしたい。まず，いつ，どのくらいの人が，どこへ流出したかを把えてみよう[16]。

第2—1図から，転出は全体としては昭和31年から52年頃までの間で多いことがわかるが，細かく見ると，31～32年，35～39年，44～46年の3つのピークがあるように読みとれる。他方転入をみると，31～32年に著しく多い。これは本土複帰直後に関西や沖縄から郷里に戻った人の数を示しているものと思われる。しかし，郷里には職がなく，間もなく関西方面へと転出することになる。



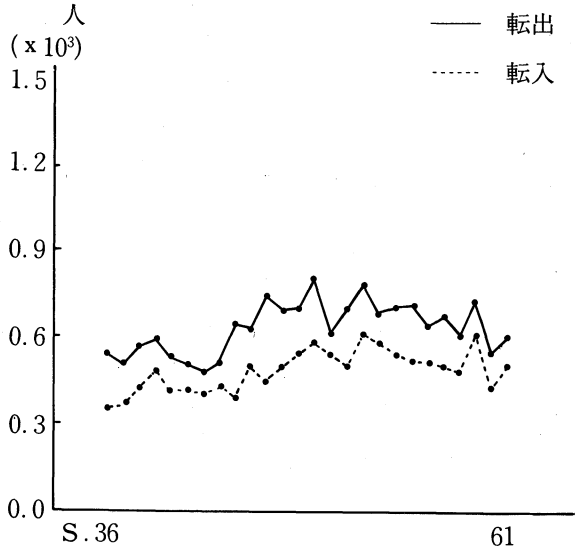

第2—1図　瀬戸内町の転入，転出
資料：県統計年鑑，町勢要覧(各年)



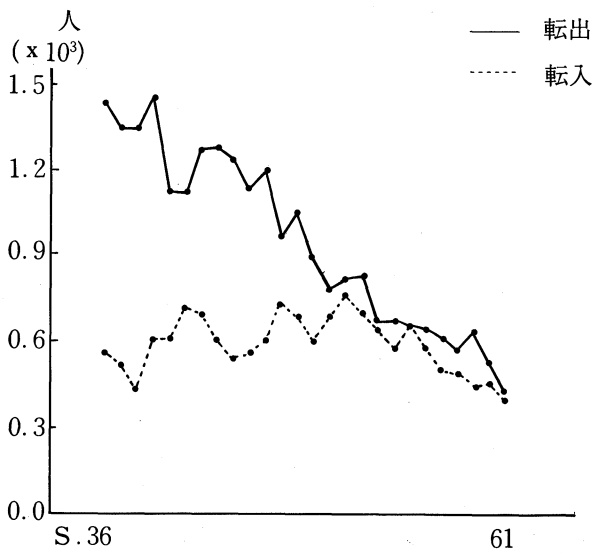

第2—2図　瀬戸内町の人口減少
資料：県統計年鑑，町勢要覧(各年)

第2—2図は，人口減少の絶対数をとり出したもので，35～39年の第1のピークと，44～46年の第2のピークという2つのピークがあったことが示されている。また，全体的には31年から49年の間に減少が大きかった。

第2—3図から県内への転出（すなわち鹿児島市や名瀬市への転出）は年による変化があまり多




第2—3図　瀬戸内町の転入，転出(県内)




第2—4図　瀬戸内町の転入，転出(県外)

くないことが，第2—4図から県外への転出は，30年代に最大で，40年代がそれに続いており，転入を含めて考えると46年頃まで県外の転出による人口減少が著しかったことがわかる。

つぎに，転出者の年齢的特徴および転出理由についてみよう。第2—1表は奄美全体であることおよび昭和42～45年のみという制約があるが，これによると，次の3点が指摘される。第1は，15～19歳の高卒者と見られる者が男で3分の2，女で6割と最大であることである。第2は，5歳階級に直してみても，14歳以下の割合が比較的高く（男4.8%），親と一緒の家族ぐるみの流出もかなりあることを窺わせる点である。第3は，男女のちがいに注目すると，男では30代（5歳階級に直すと2.9%），40代（同じく2.5%）が比較的高いのに対し，女では20代が4.4%，5.2%とかなり高く（男子の3倍），また60代以上も高く（男の倍以上）なっており，

第2—1表　「転出者」の年令的特徴（奄美全体）

| | | S.42 | S.43 | S.44 | S.45 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 0～14 | 268 | 473 | 518 | 180 | 1439 | 14.4 |
| | 15～ | 1496 | 1609 | 1767 | 1762 | 6634 | 66.5 |
| | 20～ | 57 | 141 | △25 | 4 | 177 | 1.8 |
| | 25～ | 42 | 88 | 22 | △35 | 117 | 1.2 |
| | 30～ | 181 | 183 | 166 | 50 | 580 | 5.8 |
| | 40～ | 89 | 230 | 151 | 42 | 512 | 5.1 |
| | 50～ | 60 | 94 | 109 | 44 | 307 | 3.1 |
| | 60～ | 35 | 44 | 79 | 52 | 210 | 2.1 |
| 合計 | | 2228 | 2862 | 2787 | 2099 | 9976 | 100.0 |
| 女 | 0～14 | 272 | 332 | 406 | 217 | 1227 | 12.4 |
| | 15～ | 1265 | 1573 | 1892 | 1570 | 6000 | 60.8 |
| | 20～ | 165 | 154 | 136 | △24 | 431 | 4.4 |
| | 25～ | 93 | 143 | 182 | 98 | 516 | 5.2 |
| | 30～ | 97 | 142 | 162 | 118 | 519 | 5.3 |
| | 40～ | 81 | 111 | 144 | 62 | 398 | 4.7 |
| | 50～ | 65 | 91 | 81 | 66 | 303 | 3.1 |
| | 60～ | 81 | 64 | 150 | 169 | 464 | 4.7 |
| 合計 | | 2119 | 2610 | 2853 | 2276 | 9859 | 100.0 |

注　1)「転出者」とは転出—転入のこと
　　2) 各年は10～9月
資料：「奄美群島の概況」各年度

家族そろっての転出のほか，20代の女性では婚姻のためもありそうなことを示していることである。

転出理由を示した第２—２表からは，次の３点が指摘されよう。第１点は男女とも「就職」が半数近くを占めていて最大であることである。第２点は，男女のちがいに注目すると，男では「転勤・転職」，「就学」等が多いのに対し，女子では「世帯主の移動に伴う」が４分の１以上と多くなっていることである。また，「出稼ぎ」のための転出はもっぱら男中心であり，反対に「婚姻」による転出は圧倒的に女子に多い。第３点は就職や就学がもっぱら学卒者を中心としたものであるのに対し，「世帯主の移動に伴う」ものは家族ぐるみの転出であると考えられ，この比率の高さが注目される（男12.2%女26.9%，平均19.1%）。

第２—２表　転出理由（奄美全体）

| | | S.42 | S.43 | S.44 | S.45 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 就職 | 2183 | 2479 | 2914 | 3187 | 10763 | 47.6 |
| | 就学 | 449 | 457 | 854 | 903 | 2663 | 11.8 |
| | 転勤・転職 | 773 | 965 | 567 | 599 | 2904 | 12.8 |
| | 出稼ぎ | 161 | 310 | 372 | 259 | 1102 | 4.9 |
| | 婚姻 | 3 | 5 | 7 | 5 | 20 | 0.1 |
| | 世帯主の移動 | 483 | 689 | 842 | 747 | 2762 | 12.2 |
| | その他 | 405 | 479 | 723 | 693 | 2300 | 10.2 |
| 合計 | | 4457 | 5384 | 6279 | 6393 | 22614 | 100.0 |
| 女 | 就職 | 1675 | 2000 | 2218 | 2467 | 8360 | 42.0 |
| | 就学 | 280 | 247 | 529 | 516 | 1572 | 7.9 |
| | 転勤・転職 | 216 | 282 | 33 | 54 | 585 | 2.9 |
| | 出稼ぎ | 8 | 5 | 40 | 16 | 69 | 0.3 |
| | 婚姻 | 289 | 261 | 234 | 205 | 939 | 4.7 |
| | 世帯主の移動 | 929 | 1231 | 1576 | 1605 | 5341 | 26.9 |
| | その他 | 547 | 597 | 957 | 917 | 3018 | 15.2 |
| 合計 | | 3894 | 4623 | 5587 | 5780 | 19884 | 100.0 |

注　：43年迄と44年以降は項目が多少異なるが，前者の「就職」「求職」「離職」は後者の「職につく」に，また，「転勤」「転職・転業」は「転勤」に入れて整理した。
資料：「奄美群島の概況」各年度

## 第２節　出稼ぎの動向

家族ぐるみのいわゆる挙家離村の場合，全員がそろって一度に出るのではなく，はじめ世帯主が１人で出て，何年か後にある程度めどが立ってから家族を呼び寄せるという形態が一般的であると言われている。こうした意味で，世帯主一人の出稼ぎは，家族ぐるみの転出の前段階として位置づけられるかも知れない。そこで，本節では出稼ぎについて参考のために扱っておきたい。

出稼ぎ先では近畿が７割を占め，なかでも兵庫県そして大阪府が多く，中部，関東の順になっている（第２—３表）。

従事した仕事を産業別にみると，製造業なか

第２—３表　瀬戸内町の出稼ぎ（地域別）

| | S.46 | S.47 | S.48 | S.49 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 関東 | 10 | 23 | 49 | 39 | 121 | 13.1 |
| 千葉 | 3 | 0 | | | | |
| 東京 | 2 | 12 | | | | |
| 神奈川 | 5 | 11 | | | | |
| 中部 | 29 | 16 | 56 | 62 | 163 | 17.7 |
| 愛知 | 10 | 16 | | | | |
| 三重 | 19 | 0 | | | | |
| 近畿 | 235 | 141 | 162 | 98 | 636 | 69.1 |
| 京都 | 3 | 0 | | | | |
| 大阪 | 78 | 56 | | | | |
| 兵庫 | 154 | 85 | | | | |
| その他 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0.1 |
| 合計 | 274 | 180 | 267 | 200 | 921 | 100.0 |

資料：奄美群島の概況，各年度（名瀬公共職業安定所）

でも金属，非鉄金属，鉄鋼，機械といった重工業，とくに金属関係が多いようである（第2—4表）。

仕事の内容では「その他」が最も多く，その内容は「雑役夫」的なものが多いのかも知れない。次いで「土工」約20%，「大工」約10%となっている（第2—5表）。

第2—4表　瀬戸内町の出稼ぎ（産業別）

| | S.46 | S.47 | S.48 | S.49 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 製造業 | 191 | 116 | 200 | 159 | 666 | 72.3 |
| 金属 | 70 | 45 | | | | |
| 非鉄 | 71 | 28 | | | | |
| 鉄綱 | 23 | 11 | | | | |
| 機械 | 18 | 4 | | | | |
| 木材 | 0 | 12 | | | | |
| 繊維 | 5 | 6 | | | | |
| 化学 | 2 | 7 | | | | |
| 窯業 | 2 | 3 | | | | |
| 建設業 | 4 | 11 | 18 | 11 | 44 | 4.8 |
| その他 | 79 | 53 | 49 | 30 | 211 | 22.9 |
| 卸小売 | 5 | 4 | | | | |
| その他 | 74 | 49 | | | | |
| 合計 | 274 | 180 | 267 | 200 | 921 | 100.0 |

資料：奄美群島の概況，各年度（名瀬公共職業安定所）

第2—5表　瀬戸内町の出稼ぎ（仕事の内容）

| | S.42 | S.44 | S.46 | S.48 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土工 | 86 | 84 | 30 | 32 | 232 | 18.9 |
| 大工 | 28 | 24 | 28 | 34 | 114 | 9.3 |
| 漁夫 | 8 | 2 | 9 | 5 | 24 | 2.0 |
| 運転手 | 2 | 2 | 6 | 7 | 17 | 1.4 |
| 農夫 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.0 |
| その他 | 132 | 213 | 237 | 258 | 840 | 68.5 |
| 雑役夫 | | | | 133 | | |
| その他 | | | | 125 | | |
| 合計 | 256 | 325 | 310 | 336 | 1227 | 100.0 |

資料：奄美群島の概況，各年度（県企画部統計課）

仕事の見つけ方（出稼ぎ経路）では，「親戚・知人の世話」が6割で最大であり，この傾向は40年代の始めほど強い。第2位は「職安の紹介」で，40年代中頃から急にふえている（第2—6表）。以上の事は，郷友会形成の力とも言うべき「人のつながりの強さ」を感じさせるものである。

最後に出稼ぎの理由をみると，当然のことながら「生活費」のためが8割で最大であり，「教育資金」もふえてはいるが，「営農資金」はきわめて少いと言えよう（第2—7表）。

以上を要約すると，生活費のため，人をたよって仕事を探し，多くは兵庫や大阪の金属関係製造業の雑役的な仕事につくというタイプが浮かび上ってくる。

第2—6表　瀬戸内町の出稼ぎ（出稼ぎ経路）

| | S.42 | S.44 | S.46 | S.48 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 親戚知人の世話 | 208 | 226 | 170 | 138 | 742 | 60.5 |
| 職安の紹介 | 3 | 35 | 119 | 129 | 286 | 23.3 |
| 自分で(広告) | 28 | 21 | 7 | 33 | 89 | 7.3 |
| 会社の直接募集 | 10 | 35 | 9 | 26 | 80 | 6.5 |
| 勧誘者の紹介 | 7 | 8 | 5 | 10 | 30 | 2.4 |
| 合計 | 256 | 325 | 310 | 336 | 1227 | 100.0 |

資料：奄美群島の概況，各年度（県企画部統計課）

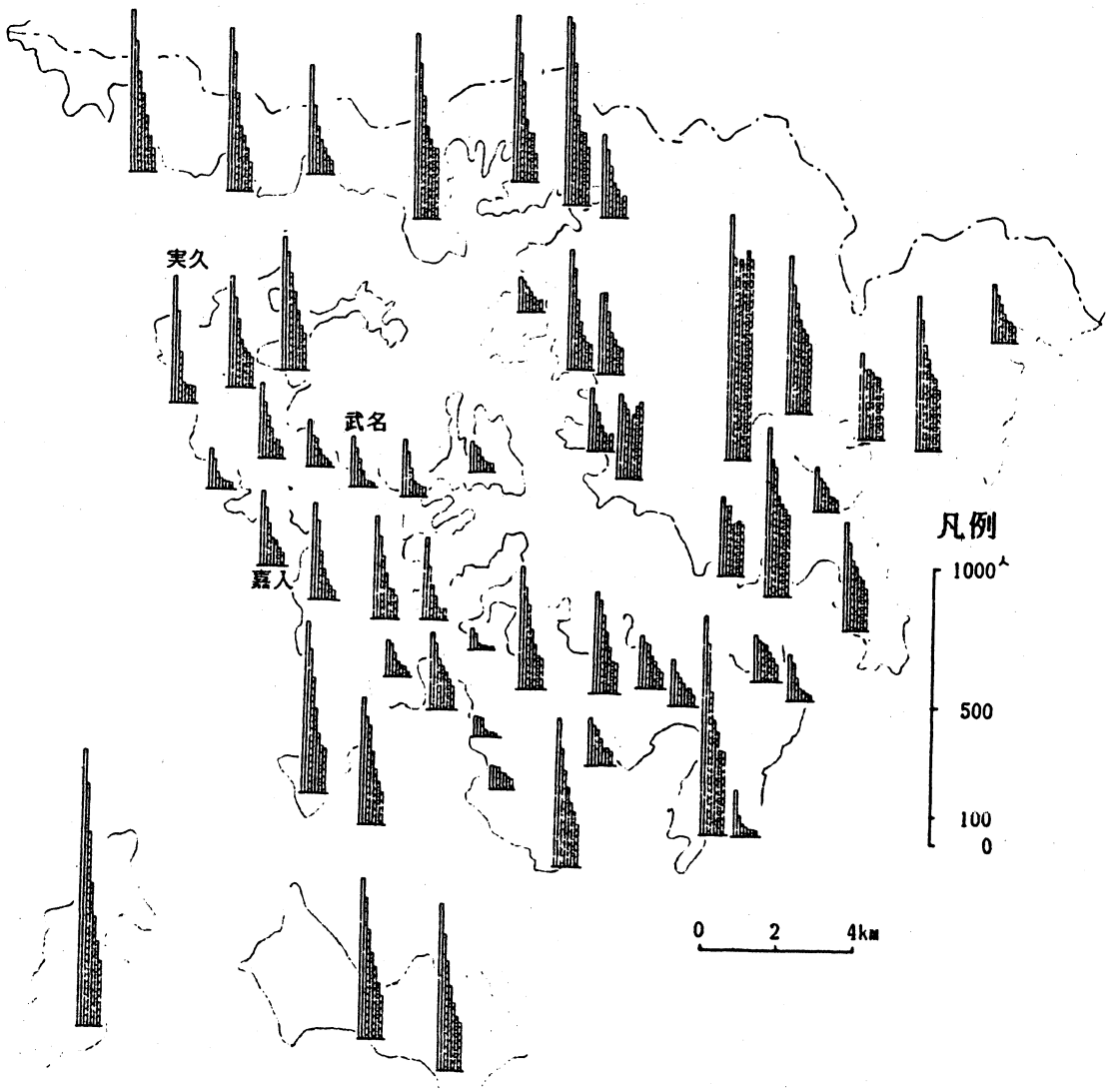
第2—7表　瀬戸内町の出稼ぎ（理由）

| | S.42 | S.44 | S.46 | S.48 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 生活費 | 205 | 273 | 221 | 284 | 983 | 80.1 |
| 生活費以外 | 51 | 52 | 88 | 52 | 243 | 19.8 |
| 教育資金 | 30 | 38 | 82 | | | |
| 営農資金 | 12 | 14 | 6 | | | |
| 小使い稼ぎ | 8 | 0 | 0 | | | |
| 労力に余裕 | 1 | 0 | 0 | | | |
| その他 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.1 |
| 合計 | 256 | 325 | 310 | 336 | 1227 | 100.0 |

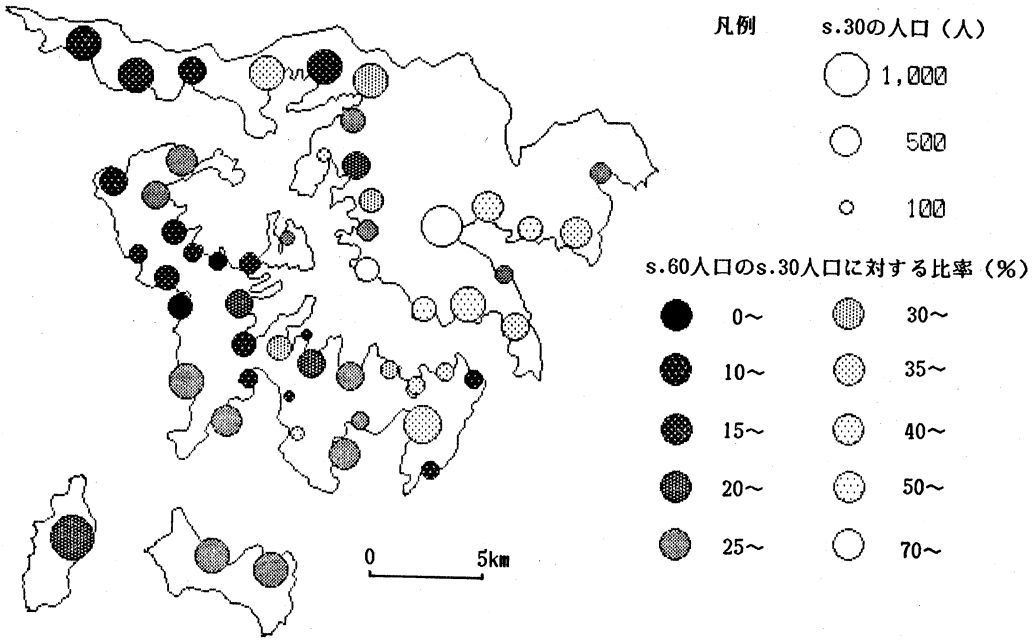
資料：奄美群島の概況，各年度（県企画部統計課）

## 第3節　瀬戸内町内の集落レベルの検討

本節では，集落を単位にして人口減少状況を考察する。第2—5図は，昭和30年から5年おきに昭和60年までの人口減少状況を示している。古仁屋周辺の集落のみは人口があまり減少していないが，その他はすべて30年から年とともに減少している。加計呂麻島では集落規模の小さいものが多く，一般に集落規模の小さいものは減少率も高くなっている。第2—6図において，昭和60年の人口が30年の人口の10%以下となったのは嘉入と武名の2つだけであり，20%以下をあげると加計呂麻島に14集落(旧実久村地区が14集落中の9集落，旧鎮西村地区が16集落中5集落)，大島本島の旧西方村地区に4集落で，あわせて18集落である。以上のように，加計呂麻島の旧実久村地区で人口減少が最も著しくなっている。




第2—5図　瀬戸内町の集落別人口減少
(S.30～S.60) その1
注：古仁屋を除く　資料：各年国勢調査

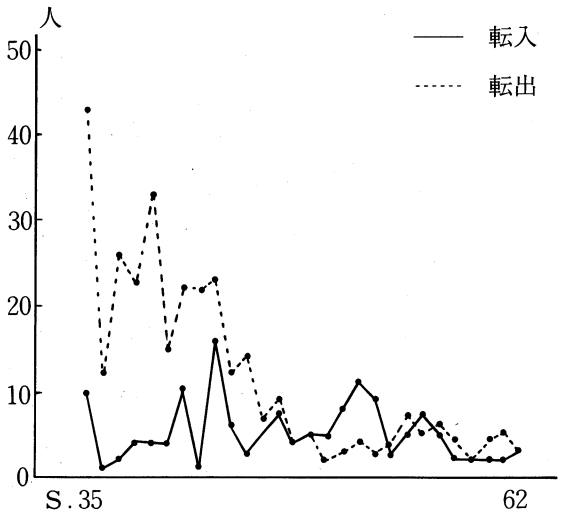



第2—6図　瀬戸内町の集落別人口減少（S.30～S.60）その2
注：古仁屋を除く　　資料：各年国勢調査

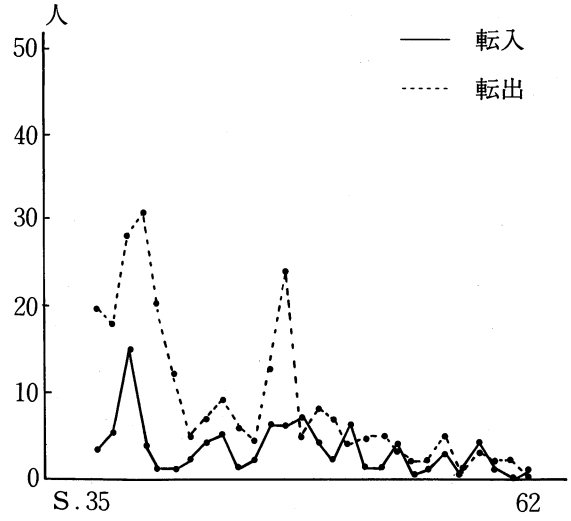
そこで今回の調査での集落選定に当っては，人口減少率の高い集落を第1の基準にし，その中で中規模集落の代表として「嘉入」と「実久」を，小規模集落の代表として「武名」を選定して，調査対象集落とした。

そこで次に，これら3集落の転出，転入状況を集落毎にみた。実久では35～45年の間に転出が多く，その後は少い。転入については51～53年にやや多いのが目立っている。つまり，戻ってきた者の存在を示唆するものと思われる（第2—7図)。嘉入における転出には2つのピークがあり，35～40年（とくに37～38年がピーク）と46～47年とである（第2—8図)。武名における転出は35～41年と45～46年の2つのピークがあると言えようか。後者は45年の台風のためと考えられる[17]。又，近年の56～59年にやや転入が多いようである（第2—9図)。

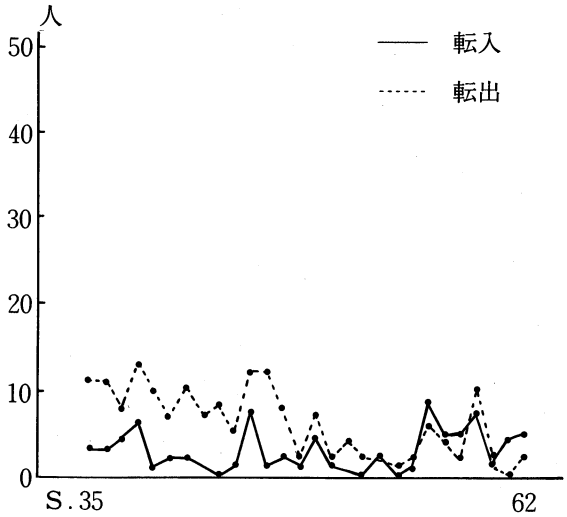
以上のことから次の2点を指摘しておきたい。第1は，転出の時期に集落によって多少の違いがみられることである。第2は，転入について50年以降も一定の量の転入がみられることである。第2の点は，現実は一方的流出ばかりでなく戻る者もいることを示すもので，この点は聴き取りによっても確められている。




第2—7図　実久の転入，転出
注：35年3月，40年9月42年1，2，3月は欠落
資料：町役場企画課の資料による



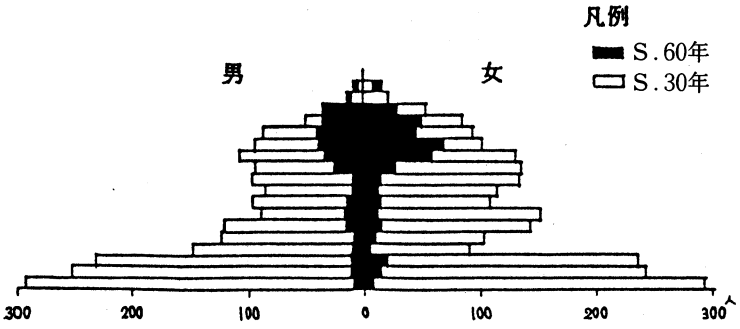

第２—８図　嘉入の転入，転出




第２—９図　武名の転入，転出

## 第４節　旧実久村地区の現状—人口構成を中心に—

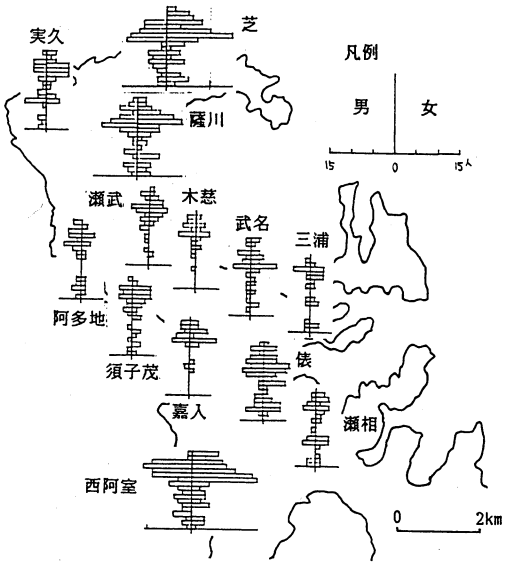
調査，研究対象地区として選定した旧実久村地区について，本節ではその人口構成を中心に若干の考察を行いたい。昭和60年の人口構成は50歳以上の高年者中心の社会であることを示しているが，昭和30年にはほぼピラミッド型を示していたのであった（第２—10図）。両者を比較すると，80歳以上と85歳以上をのぞくと他は全階級で人口が減少しており，とくに50歳以下そのなかでも15歳以下が著しく減少していることがわかる。




第２—10図　旧実久村地区の５歳階級別人口構成（S.30とS.60）

資料：奄美大島の概況，昭和31年版，及び昭和60年国勢調査

次に，昭和60年現在の人口構成を集落別にみた（第２—11図）。この図から人口構成に２～３のタイプがみられるように思う。第１のタイプは集落規模が大で人口も多く，15歳以下の若年層もある程度存在する集




第２—11図　集落別人口構成（旧実久村地区）

資料：昭和60年国勢調査

落で，芝，薩川，西阿室が相当し，俵もここに入れてよいだろう。第2のタイプは，若年層（子供）が全くあるいはほとんどいない集落で，嘉入と木慈がその例であり，瀬武もこれに近い，第3のタイプは前2者の中間であって，若年層（子供）が少しではあるが存在する集落で，実久，阿多地，武名，三浦，須子茂，瀬相が相当する。このように整理すると，調査対象としては，第2のタイプから1つ，第3のタイプから2つ選んだことになる。

## 第3章　研究対象集落居住者の転出状況

本章では，研究対象として選定した3集落における昭和30年頃の居住者全体を対象にして，その人達の現在をできるだけ明らかにすることを目標としている。そのための方法として次の2つのアプローチを行った。その第1は，かって居住者の全体を何らかの方法で明らかにし，その人達の現況を集落の事をよく知っている人に尋ねて聞くという方法である。この場合，かつての名簿があるとやりやすい。第2の方法は，郷友会員名簿を手がかりにするやり方である。この場合，郷友会そのものから入る方法がより直接的であるが，母村の側からはこの方法は行いにくく，今回のような母村の側からだけの調査では不十分となる。

### 第1節　かつての居住者名簿と聴き取り

第1の方法を3集落でそれぞれ追究した。実久については名簿については入手したが，現況に関するインフォーマントを捜すことができなかったため，不十分なので今回は省略する。嘉入については，かつての居住者名簿として土地台張[18]を使用した。ここには102名の名前が記載されているが，うち2名は部落の土地に付けた仮名であり，他の2名は同一世帯であるため，99の世帯主の名前が判明した。聴き取りは部落長婦人のMさんによったが，11名は不明であり，残りの88名が追跡の対象となった。武名のかつての居住者については，昭和35年の作業出勤簿によった[19]。ここには41名，41世帯主の名前が記入されている[20]。聴き取りは部落長のM氏，部落員のS氏，S氏婦人の3人によった[21]。

第3—1表は，かつての嘉入居住者の現況を示している。嘉入居住者は4分の1に

第3—1表　かつての嘉入居住者の現況

| | 本人 | 妻 | 息子 | 嫁 | 娘 | 孫 | 弟 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 嘉入 | 4 | 5 | 7 | 2 | | 1 | | 19 | 25.0 |
| 古仁屋 | 3 | 1 | 6 | 1 | 3 | | | 14 | 18.4 |
| 名瀬 | | | 3 | | | | | 3 | 3.9 |
| 鹿児島 | | | 4 | | | | | 4 | 5.3 |
| 沖縄 | | | 3 | | | | | 3 | 3.9 |
| 阪神 | 7 | 2 | 17 | 1 | 2 | 1 | 1 | 31 | 40.8 |
| 京浜 | | | | | | 1 | | 1 | 1.3 |
| その他 | | | 1 | | | | | 1 | 1.3 |
| 合計 | 14 | 8 | 41 | 4 | 5 | 3 | | 76 | 100.0 |

注1)　土地台帳記載の99名中、全くわからない者が11名，本人が死亡していて「後継者」のわからない者が5名，「後継者」のいない者が7名，以上23名を除いた。
2)　本人以外は，本人が死亡した場合の「後継者」である。
3)　名瀬には大和村1を，鹿児島には宮崎1を，阪神には滋賀1をそれぞれ含む。その他1は新潟。

資料：聞取りによる。

減少したが，これは必ずしも移動しなかった者の割合を示すものではなく，転出して再び帰郷した者をも含んでいる。転出先では阪神が4割と最大で，古仁屋の2割弱が次に多い[22]。さらに，鹿児島，名瀬，沖縄が続く。つまり，現在は瀬戸内町と阪神に集中しており，これ以外では瀬戸内町の近く(県内や隣県)に多く，京浜はきわめて少い。続柄を含めた特徴をみると，子供達は一般に阪神が多いのに対し，妻の場合は嘉入の比率が高い傾向がある。

次に，武名の場合をみよう（第3—2表)。やはり，武名には2割弱しか居住しておらず，古仁屋を含めても3割に満たない。転出先は阪神が最大で5割を越え，鹿児島も多い。従って，現在は阪神，瀬戸内町，鹿児島の3カ所に集中していると言えよう。続柄を含めた特徴をみると，息子の代では阪神その他へほとんど転出しているのに対し，本人や妻の代では武名の比重が高くなっていて，嘉入と同様の傾向を示している。

第3—2表　かつての武名居住者の現況

| | 本人 | 妻 | 息子 | 嫁 | 娘 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 武名 | 4 | 3 | | | | 7 | 17.9 |
| 古仁屋 | 1 | | 2 | 1 | | 4 | 10.3 |
| 大島郡 | | | 1 | | | 1 | 2.6 |
| 鹿児島 | 1 | | 3 | | 1 | 5 | 12.8 |
| 福岡 | | | | | 1 | 1 | 2.6 |
| 広島 | | | 1 | | | 1 | 2.6 |
| 阪神 | 4 | 3 | 11 | 1 | 1 | 20 | 51.3 |
| 合計 | 10 | 6 | 18 | 2 | 3 | 39 | 100.0 |

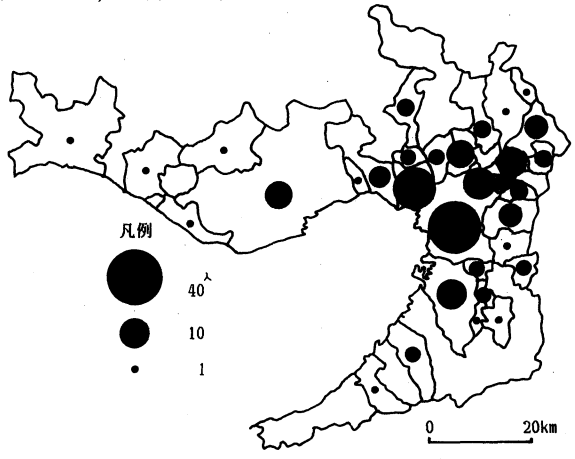
注1)　41名中「後継者」なしの2名を除いた。
2)　大島郡の1は徳之島，阪神には和歌山1を含む。
資料：聞取りによる

以上をまとめると，第1に，阪神地方へ転出した世帯が最も多く，とくに後継者（子供）の世代でこの傾向が強いこと，第2に，集落居住者が次に多く，町内（古仁屋）への転居もかなりあること，第3に，鹿児島への転出がこれらに続いていることなどとなろう。

## 第2節　郷友会員名簿

第2の方法である郷友会員名簿の検討に入ろう。関西における郷友会員名簿は実久，武名については入手できなかったので，嘉入についてのみ検討する。「関西嘉入会員名簿」[23]によると，会の成立は昭和10年で，戦中から戦後にかけて中断があったが，昭和24年に再建されている。会員は世帯単位であり，175世帯，総人数333人[24]を数え，郷土嘉入在住者20世帯，29人[25]の名前をものせている。

会員居住者を府県別に整理してみると，大阪府と兵庫県で94を占め，とくに大阪府に集中している（第3—3表)。そこで更に市町村別に整理すると，大阪市(37)，尼崎市(22)を中心とし（この2市で33.7%)，守口(12)，寝屋川(11)，堺(10)，吹田(9)，神戸(9)と隣接各市が続き（以上で




第3—1図　関西嘉入会員の分布(市町村別)
注：大阪府と兵庫県のみ　資料：関西嘉入会，会員名簿

62.9%），さらに，東大阪（6），西宮（5）と続く（以上で72.6%）（第3—1図）。大阪中心が本会員分布の特色と言えよう。大阪市内の区別の分布もみたが，此花区，東淀川区にやや多い程度で，とくに集中した地区があるとは言えない（第3—4表）。

次に，阪神に次いで転出者の多い鹿児島における出身者の状況を，「鹿児島瀬戸内会会員名簿」[26]により見よう。この名簿の総会員数は429世帯であるが，このうち旧実区村地区のみでは88世帯である。旧実区村地区出身者を出身集落別にみると，嘉入が最も多く，芝，瀬武，実久などが次でいる（第3—5表）。旧実久村地区出身者の市内における居住分布をみたが，鴨池・郡元地区にやや多いものの，とくに目立つた傾向があるようには思われない（第3—6表）。

第3—3表　府県別嘉入会員の分布

| | 世帯数 | 割合(%) |
|---|---|---|
| 大阪府 | 118 | 67.4 |
| 兵庫県 | 46 | 26.3 |
| 奈良県 | 2 | 1.1 |
| 京都府 | 1 | 0.6 |
| 滋賀県 | 1 | 0.6 |
| 愛知県 | 3 | 1.7 |
| 不明 | 4 | 2.3 |
| 合計 | 175 | 100.0 |

資料：関西嘉入会，会員名簿（昭和62年11月）

第3—4表　大阪市内の嘉入会員の分布

| 区別 | 世帯数 | 割合(%) | 区別 | 世帯数 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 西 | 1 | 2.7 | 住之江 | 1 | 2.7 |
| 天王寺 | 1 | 2.7 | 大正 | 2 | 5.4 |
| 都島 | 1 | 2.7 | 港 | 2 | 5.4 |
| 鶴見 | 3 | 8.1 | 此花 | 6 | 16.2 |
| 城東 | 2 | 5.4 | 福島 | 1 | 2.7 |
| 生野 | 1 | 2.7 | 大淀 | 1 | 2.7 |
| 平野 | 3 | 8.1 | 西淀川 | 2 | 5.4 |
| 東住吉 | 2 | 5.4 | 淀川 | 1 | 2.7 |
| 住吉 | 1 | 2.7 | 東淀川 | 5 | 13.5 |
| 西成 | 1 | 2.7 | 合計 | 37 | 100.0 |

資料：関西嘉入会，会員名簿（昭和62年11月）

第3—5表　鹿児島瀬戸内会員の出身地

| | 世帯数 | 割合(%) | | 世帯数 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 実久 | 8 | 9.1 | 三浦 | 6 | 6.8 |
| 芝 | 12 | 13.6 | 瀬相 | 6 | 6.8 |
| 薩川 | 6 | 6.8 | 西阿室 | 3 | 3.4 |
| 瀬武 | 9 | 10.2 | 嘉入 | 20 | 22.7 |
| 木慈 | 2 | 2.3 | 須古茂 | 6 | 6.8 |
| 武名 | 6 | 6.8 | 阿多地 | 4 | 4.5 |
| | | | 合計 | 88 | 100.0 |

注　：旧実久村地区出身者のみ
資料：鹿児島瀬戸内会，会員名簿（昭和61年11月）

第3—6表　鹿児島瀬戸内会員の分布

| | 世帯数 | 割合(%) |
|---|---|---|
| 伊敷・草牟田 | 8 | 9.1 |
| 上町・吉野 | 12 | 13.6 |
| 中央 | 12 | 13.6 |
| 西駅・田上 | 16 | 18.2 |
| 鴨池・郡元 | 20 | 22.7 |
| 桜島 | 0 | 0.0 |
| 谷山 | 7 | 8.0 |
| 鹿児島市外 | 13 | 14.8 |
| 合計 | 88 | 100.0 |

注　：旧実久村地区出身者のみ
資料：鹿児島瀬戸内会，会員名簿

## 第4章　母村の実態

奄美から多くの人々が都会へ流出した。日本経済の高度成長期に，とりわけそれは著しかった。都会の波にもまれる中で，彼等は郷友会に結集した。ところで，残された母村である奄美の各集落はどうなっているのだろうか。この実態をアンケートの結果から把握することが，本章の課題である。アンケート調査の内容は，主に次の4つに区分されよう。第1は，現在の集落生活の実態であ

り，第2は，後継者についてであり，第3は，将来における転出等の意向についてであり，第4は各家族内での転出者の実態についてである。以下，これらについて述べて行きたい。アンケートは調査票を用意し，我々11名が原則として2名ずつの班に分かれ，各家を訪問して聴きとりするという形で行なわれた。

## 第1節　生活実態

まず，最近30年間の生活の変化を尋ねてみた（第4—1表）。結果は「良くなった」方の答が6割近くもあり，「悪くなった」方の答は1割未満であって，過疎地というイメージで事前に我々が考えていた予想とは正反対で，全く意外であった。こうした結果となった理由として，第1に，30年というかなり前との比較であり，しかもそれが復帰直後であったこと，第2に，全般的に高齢者が多く，不満を言っても仕方がないというようなあきらめムードが感じられたことなどが考えられる。この他，3つのうち1集落では，部落長さんが集会場に放送で人を集めてくれたために，非常に能率が良かった反面，返って行政側の調査とみられて本音を語ってくれなかった面もあったかも知れない[27]。

そこで次に，良くなったことの中味を具体的に書いてもらった（第4—2表）。第1は道路や交通事情[28]，第2は食物などの物質が豊富になったこと，

第4—1表　最近30年間の生活の変化

| | 実久 | 嘉入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 非常に良くなった | 4 | 9 | 1 | 14 | 29.8 |
| やや良くなった | 7 | 3 | 3 | 13 | 27.7 |
| 良くも悪くもなった | 5 | 1 | 3 | 9 | 19.1 |
| 変わらない | 3 | 1 | 0 | 4 | 8.5 |
| やや悪くなった | 2 | 0 | 0 | 2 | 4.3 |
| 非常に悪くなった | 1 | 0 | 1 | 2 | 4.3 |
| その他 | 1 | 2 | 0 | 3 | 6.4 |
| 合　　計 | 23 | 16 | 8 | 47 | 100.0 |

第4—2表　最近30年間に良くなった事

| | 実久 | 嘉入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 道路や交通事情 | 10 | 12 | 4 | 26 | 35.6 |
| 食物など物資が豊富 | 6 | 10 | 1 | 17 | 23.3 |
| 家庭電気製品や電話の普及 | 4 | 3 | 4 | 11 | 15.1 |
| 年金，生活保障の存在 | 2 | 1 | 2 | 5 | 6.8 |
| 住居，外灯などの生活環境 | 2 | 2 | 0 | 4 | 5.5 |
| 医　　療 | 2 | 1 | 0 | 3 | 4.1 |
| のんびりできる | 2 | 0 | 0 | 2 | 2.7 |
| 送金してくれる | 2 | 0 | 0 | 2 | 2.7 |
| 仕事がある | 1 | 0 | 1 | 2 | 2.7 |
| 家族的な付合い | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.4 |
| 合　　計 | 32 | 29 | 12 | 73 | 100.0 |

表4—3表　最近30年間に悪くなった事

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 戸数，人口の減少 | 3 | 5 | 3 | 11 | 24.4 |
| 若者が少ない | 3 | 4 | 2 | 9 | 20.0 |
| 仕事がない | 2 | 0 | 2 | 4 | 8.9 |
| 老齢化 | 0 | 2 | 2 | 4 | 8.9 |
| 物価が高い | 3 | 0 | 0 | 3 | 6.7 |
| 集落，野山が荒れる | 2 | 1 | 0 | 3 | 6.7 |
| 医療施設の不備 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 教育施設の不備 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 税金が多い | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 紬の不況 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 交際費など出費が多い | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 自給自足ができない | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 何でも金の世の中 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 人間味がなくなった | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 子供が当てにならない | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 宗教がおおく煩わしい | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 母子世帯になった | 0 | 0 | 1 | 1 | 2.2 |
| 合　　計 | 37 | 19 | 20 | 76 | 100.0 |

第3は家庭電気製品や電話の普及であり，以上で74%と全体の4分の3を占める。

逆に，悪くなった点はないかについても尋ねた（第4—3表）。その結果は，人口減少それ自体や，これに伴って起る諸結果がほとんどであり，「戸数，人口の減少」，「若者が少ない」，「仕事がない」，「老齢化」までの上位4つで6割をこえる。

次に，やや視点を変えて，現在の居住地の良さ，悪さを聞いた。良い点について，第4—4表を少しまとめると，「自然の良さ」に関するものが約4割（41.9%），「自由でのんびり」にまとめられそうなのが約3割（31.5%），「生れ育った故郷」にまとめられるのが約2割（19.6%）となって，以上で9割を占める。

反対に，困る事の方は「病気，とくに急病の時」が圧倒的に多く，この他では過疎現象そのもの，又はこれに伴う諸困難が多い（第4—5表）。「側溝による水害」もこの一例で，道路を整備・舗装し，側溝をつけたために，大雨の際，水がいっせいに集落内に入り込んで，それまでになかった水害を発生させたりしている。

表4—4表　現在ここに住んでいて良いと思う事

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 自由でのんびりできる | 6 | 4 | 4 | 14 | 18.4 |
| 空気がきれい | 7 | 1 | 3 | 11 | 14.5 |
| 自然が豊か | 3 | 4 | 2 | 9 | 11.8 |
| 生れ育った故郷 | 1 | 3 | 2 | 6 | 7.9 |
| 自給自足が可能 | 3 | 0 | 1 | 4 | 5.3 |
| 新鮮な魚がとれる | 3 | 0 | 0 | 3 | 3.9 |
| 海がきれい | 3 | 0 | 0 | 3 | 3.9 |
| 住み慣れている | 0 | 1 | 2 | 3 | 3.9 |
| 風景がいい | 2 | 0 | 0 | 2 | 2.6 |
| 自由にウニ，貝がとれる | 2 | 0 | 0 | 2 | 2.6 |
| 静かである | 1 | 0 | 1 | 2 | 2.6 |
| 人情がある | 0 | 1 | 1 | 2 | 2.6 |
| 冬暖かい | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.3 |
| 花などがまわりにある | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.3 |
| 生活環境が良い | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.3 |
| 生活保護を受けられる | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.3 |
| 車が少ない | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.3 |
| 老後には良い | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.3 |
| 自分なりの生活ができる | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.3 |
| 病院ができること | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.3 |
| 祖先がいる | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.3 |
| 平和である | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.3 |
| ゲートボールができる | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.3 |
| 助けあいの生活 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1.3 |
| 昔の気持があって明るい | 0 | 0 | 1 | 1 | 1.3 |
| ヘリボートによる交通 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1.3 |
| 仲良くできる | 0 | 0 | 1 | 1 | 1.3 |
| 合　　計 | 37 | 19 | 20 | 76 | 100.0 |

次に，現在ここで生活してゆく上で，行政に対して何をしてほしいと望んでいるかを，より具体的に尋ねた(第4—6表)。この問いでは答をこちらで用意し，3位まで順位をつけて回答してもらったが，1位のみまた2位までしか答えてくれなかった場合もある。最も要望が強いのは「雇用機会の拡大」で，次いで「医療施設の充実」，さらに「老人・福祉対策」とほぼ予想された内容であった。このうち1位のみを整理すると，雇用と医療の要求度の高さがとくにはっきりする（第4—7表)。

生活実態の最後に「生活に必要な収入源」について尋ねた（第4—8表)。これも答をこちらで用意し，3位まで順位をつけてもらったのだが，1位のみ又は2位までの回答も含まれている。収入源の特色として「年金」，「生活保護」，「その他（恩給等)」などのいわば不労所得が約6割を占めていることがあげられよう。こうした生活基盤が先に表明された意識にも反映しているのではな

表４—５表　現在ここに住んでいて一番因る事

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 病気とくに急病の時 | 11 | 6 | 5 | 22 | 30.6 |
| ハブ，イノシシ | 5 | 1 | 1 | 7 | 9.7 |
| 仕事、収入がないこと | 4 | 0 | 2 | 6 | 8.3 |
| 台風の時 | 0 | 1 | 5 | 6 | 8.3 |
| 老　後 | 2 | 1 | 1 | 4 | 5.6 |
| 悪天候でのフェリーの中止 | 2 | 1 | 0 | 3 | 4.2 |
| 教育，保育施設の不備 | 3 | 0 | 0 | 3 | 4.2 |
| 若者がいない | 0 | 1 | 2 | 3 | 4.2 |
| 側溝による水害 | 2 | 0 | 0 | 2 | 2.8 |
| 買物が不便 | 2 | 0 | 0 | 2 | 2.8 |
| 子供と遠く離れている | 1 | 1 | 0 | 2 | 2.8 |
| 部落の将来 | 0 | 1 | 1 | 2 | 2.8 |
| 交際費がかかる | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.4 |
| 日差しが強い | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.4 |
| 緊急時に不安 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.4 |
| 子供の将来に不安 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.4 |
| 色々ありすぎて諦めている | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.4 |
| 年金不足 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.4 |
| 後継者がいない | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.4 |
| 人が少ない | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.4 |
| 家族の病気 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1.4 |
| 夜中の外出 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1.4 |
| 合　計 | 37 | 16 | 19 | 72 | 100.0 |

表４—６表　行政に対する要望

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 雇用機会の拡大 | 9 | 10 | 4 | 23 | 20.7 |
| 医療施設の充実 | 10 | 4 | 6 | 20 | 18.0 |
| 老人対策・福祉対策 | 5 | 4 | 2 | 11 | 9.9 |
| 大島本島への架橋 | 3 | 4 | 1 | 8 | 7.2 |
| 大島紬対策 | 2 | 1 | 4 | 7 | 6.3 |
| 教育施設の充実 | 5 | 1 | 0 | 6 | 5.4 |
| 生活環境の整備 | 4 | 2 | 0 | 6 | 5.4 |
| その他の産業対策 | 1 | 3 | 1 | 5 | 4.5 |
| 道路の整備 | 4 | 0 | 0 | 4 | 3.6 |
| 観光対策 | 3 | 1 | 0 | 4 | 3.6 |
| バス・フェリーの充実 | 3 | 1 | 0 | 4 | 3.6 |
| 農業対策 | 1 | 0 | 1 | 2 | 1.8 |
| そ の 他 | 5 | 2 | 4 | 11 | 9.9 |
| 合　計 | 55 | 33 | 23 | 111 | 100.0 |

表４—７表　行政に対する要望（１位のみ）

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 雇用機会の拡大 | 7 | 10 | 0 | 17 | 38.6 |
| 医療施設の充実 | 5 | 0 | 3 | 8 | 18.2 |
| バス・フェリーの充実 | 2 | 1 | 0 | 3 | 6.8 |
| 大島本島への架橋 | 1 | 1 | 0 | 2 | 4.5 |
| 大島紬対策 | 0 | 0 | 2 | 2 | 4.5 |
| 農業対策 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.3 |
| 観光対策 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.3 |
| 道路の整備 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.3 |
| 教育施設の充実 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.3 |
| 生活環境の整備 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.3 |
| その他の産業対策 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2.3 |
| 老人対策・福祉対策 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2.3 |
| そ の 他 | 2 | 1 | 2 | 5 | 11.4 |
| 合　計 | 22 | 14 | 8 | 44 | 100.0 |

表４—８表　生活に必要な収入源

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 年　金 | 15 | 14 | 5 | 34 | 43.0 |
| 家族からの送金 | 6 | 5 | 3 | 14 | 17.7 |
| 生活保護 | 8 | 2 | 0 | 10 | 12.7 |
| つ と め | 4 | 0 | 2 | 8 | 10.1 |
| 商店等の自営業 | 2 | 2 | 0 | 4 | 5.1 |
| 農　業 | 1 | 2 | 0 | 3 | 3.8 |
| パ ー ト | 0 | 0 | 2 | 2 | 2.5 |
| 紬 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1.3 |
| 日 雇 い | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.3 |
| その他(恩給等) | 2 | 2 | 0 | 4 | 5.1 |
| 合　計 | 39 | 28 | 12 | 79 | 100.0 |

表４—９表　生活に必要な収入源（１位のみ）

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 年　金 | 11 | 12 | 4 | 27 | 57.4 |
| つ と め | 4 | 0 | 2 | 6 | 12.8 |
| 生活保護 | 4 | 1 | 0 | 5 | 10.6 |
| 商店等の自営業 | 2 | 2 | 0 | 4 | 8.5 |
| パ ー ト | 0 | 0 | 2 | 2 | 4.3 |
| 紬 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.1 |
| その他(漁業等) | 1 | 1 | 0 | 2 | 4.3 |
| 合　計 | 23 | 16 | 8 | 47 | 100.0 |

かろうか。次いで「家族からの送金」も20%近くを占めていて無視できないように思われる。これを1位のみ取り出して整理すると，「年金」のみで6割近くになり「生活保護」を加えると7割近くに達する（第4—9表）。ついで「つとめ」や「商店等の自営業」の収入となり，件数としては多かった「家族からの送金」は入って来ない。この理由は，これが主に都会で生活する子供たちから，盆や正月に送られるもので，主としてこれで生活が支えられるほどの金額ではないためであろう。

## 第2節　後継者の状況

集落の将来にとって，各世帯の後継者の動向が注目される。そこで，本節では後継者の現況や後継者に対する親の態度についてみよう。

各世帯の後継者が，現在，どこで何をしているかを尋ねてみた（第4—10表）。県外（主として関西）が53%と最大であり，県内（鹿児島市と名瀬市が中心）が11%，瀬戸内町内が17%であるが，町内には，集落内の場合と古仁屋との場合がある。つまり，大部分の後継者は集落内にはいない。仕事では自営業は少く，つとめの割合が高い。

表4—10表　調査世帯の後継者の現況

| | | 実久 | 喜入 | 武名 | 合　計 | | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 県外にいる | つとめ | 8 | 10 | 4 | 22 | 25 | 53.2 |
| | 自営業 | 2 | 1 | 0 | 3 | | |
| 町内にいる | つとめ | 1 | 1 | 3 | 5 | 5 | 10.6 |
| （除町内） | 自営業 | 0 | 0 | 0 | 0 | | |
| 町内にいる | つとめ | 5 | 2 | 0 | 7 | 8 | 17.0 |
| | 自営業 | 1 | 0 | 0 | 1 | | |
| 後継者がいない | | 3 | 2 | 0 | 5 | 9 | 19.1 |
| まだ子供である | | 3 | 0 | 0 | 3 | | |
| その他 | | 0 | 0 | 1 | 1 | | |
| 合　計 | | 23 | 16 | 8 | 47 | 47 | 100.0 |

後継者に対する親の希望を尋ねた（第4—11表）。回答は，「帰ってくることを期待している」，「全く諦めている」および両者の中間の3つをこちらで用意し，どれか1つを選択してもらった。結果は3者とも3分の1ずつくらいにわかれ，希望と現実とが一致しない苦しみのようなものを感じさせるものとなった。「帰ってくる事を期待している」の場合は，子供の方が何らかの意志を親の方に伝えている場合が多いようである。

表4—11表　転出した後継者に対する希望

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 帰ってくることを期待している | 2 | 6 | 2 | 10 | 29.4 |
| 帰ってきてほしいが，半ば諦めている | 3 | 3 | 5 | 11 | 32.4 |
| 全く諦めている。自立してくれれば良い | 8 | 2 | 0 | 10 | 29.4 |
| わからない（子供の定年後でないと） | 0 | 3 | 0 | 3 | 8.8 |
| 小　計 | 13 | 14 | 7 | 34 | 100.0 |
| （後継者がいない，まだ子供，同居等 | 10 | 2 | 1 | 13） | |
| 合　計 | 23 | 16 | 8 | 47 | |

## 第3節　将来についての意向

本節では，世帯主が将来をどのように考えているかについて尋ねた結果を扱う。とりわけ「転出」にかかわる彼等の意志がどうなのかを「将来はどうするつもりですか」という形で開いた。その際，こちらで答を「このままずっとここで暮らしたい」，「ここにいたいが無理かもしれない」，「出来れ

ば転出したい」の3つを用意して選択してもらい，さらに，それぞれを選択した理由について自由に述べてもらった。

その結果は「このままずっとここで暮らしたい」が7割弱，次の中間的な答が2割強であり，9割以上が，ここでの生活を望んでいて，「できれば転出したい」はわずかであった（第4—12表）。

表4—12表　将来の意向

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| a）このままずっとここで暮らしたい | 16 | 13 | 3 | 32 | 68.1 |
| b）ここに居たいが無理かもしれない | 5 | 1 | 5 | 11 | 23.4 |
| c）出来れば転出したい | 2 | 1 | 0 | 3 | 6.4 |
| d）まだ考えていない | 0 | 1 | 0 | 1 | 2.1 |
| 合　　計 | 23 | 16 | 8 | 47 | 100.0 |

次いでそれぞれの答を選択した理由をきいた。まず，「このままずっとここで暮したい」の理由は，「生れ故郷だから」が最大の25%程度であるが，これに近い「先祖の土地，祖先を守る」，「家や財産を守る」，「長年暮している」，「近所付き合い」，「新戚がいる」などを合わせると50%をこえる。

次いで「自然環境が良い」，「気候・空気が良い」などの自然の良さの指摘が多いようであり，その他さまざまである（第4—13表）。

第2の「ここに居たいが無理かもしれない」という中間的な答の理由は，「二人が元気な間はここで」が最大であるが，「子供次第」，「子供が来いと言う」など子供との関係で流動的であるとの答が半数ほどあり，自分達だけでは決められないという答え方が多いと言えるようである。（第4—14表）。

表4—13表　「a）このままずっとここで暮らしたい」の理由

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 生れ故郷だから | 3 | 6 | 2 | 11 | 24.4 |
| 先祖の土地，祖先を守る | 1 | 5 | 1 | 7 | 15.6 |
| 自然環境が良い | 1 | 2 | 1 | 4 | 8.9 |
| 暮らしやすい | 2 | 1 | 0 | 3 | 6.7 |
| 気候，空気が良い | 2 | 0 | 0 | 2 | 4.4 |
| 自由でのんびり出来る | 2 | 0 | 0 | 2 | 4.4 |
| 都会暮しが嫌い | 1 | 1 | 0 | 2 | 4.4 |
| 家や財産を守る | 1 | 1 | 0 | 2 | 4.4 |
| 長年暮らしている | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 歳をとっているので | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 身が弱く働けないので | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 近所付き合い | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 一人でも不安なく動ける | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 森林組合に入っている | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 商売を子供が継ぐまで | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 仕方がない | 1 | 0 | 0 | 1 | 2.2 |
| 人情が良い | 0 | 1 | 0 | 1 | 2.2 |
| 親戚がいる | 0 | 1 | 0 | 1 | 2.2 |
| 子供が帰ると言っている | 0 | 1 | 0 | 1 | 2.2 |
| 子供を頼っても仕方ない | 0 | 0 | 1 | 1 | 2.2 |
| 合　　計 | 21 | 19 | 5 | 45 | 100.0 |

「出来れば転出したい」はわずかであったが，その理由は，夫が死亡した人以外は皆30～40代の若い人であり，このままでいた場合に将来に不安を感じているためであるようだ（第4—15表）。

表4—14表
「b）ここに居たいが無理かもしれない」の理由

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 二人が元気な間はここで | 3 | 1 | 1 | 5 |
| 子供次第 | 1 | 0 | 2 | 3 |
| 子供が来いと言う | 0 | 1 | 2 | 3 |
| 子供の側で暮らしたい | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 子供に安定した仕事がある | 1 | 0 | 0 | 1 |
| ここは人間味がない | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 土木の仕事がある間はいいが | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 子供が来なければこちらが | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 合　　計 | 8 | 2 | 6 | 16 |

表4—15表　「c）出来れば転出したい」の理由

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 若いうちに転出・転職したい | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 父が店を出しているので | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 将来が不安 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 夫が死亡し，寂しいので | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 合　　計 | 3 | 1 | 0 | 4 |

## 第4節　調査世帯内転出者の状況

調査集落では，全世帯員が転出したいわゆる挙家離村型転出も多いが，世帯員が残っている調査対象世帯においても，青壮年層を中心に多くの世帯員が転出している。我々は前者について，その実態を捉える努力をしたが[29]，十分な結果が得られなかった。ここでは後者についての結果を述べよう。

調査世帯内転出者[30]の転出先はやはり関西が多いが，親の世代と比べると関東やその他（名古屋等の中部，岡山等の中国，福岡，沖縄など）の割合が高くなっていることが注目される（第4—16表）。転出の理由は，「就職」が3分の2，「進学」が5分の1であり，この両者で大部分を占める（第4—17表）。

表4—16表　調査世帯内転出者の転出先

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 関　西 | 23 | 21 | 10 | 54 | 45.0 |
| 関　東 | 4 | 9 | 6 | 19 | 15.8 |
| 鹿児島県(除大島郡) | 4 | 2 | 5 | 11 | 9.2 |
| 大島郡(除瀬戸内町) | 0 | 7 | 0 | 7 | 5.8 |
| 瀬戸内町 | 5 | 5 | 0 | 10 | 7.8 |
| そ の 他 | 7 | 7 | 1 | 15 | 12.5 |
| 不　明 | 1 | 3 | 0 | 4 | 3.3 |
| 合　　計 | 44 | 54 | 22 | 120 | 100.0 |
| (集　落 | 53 | 23 | 15 | 91) | |

表4—17表　転出の理由

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 就　職 | 28 | 23 | 11 | 62 | 66.7 |
| 進　学 | 2 | 11 | 6 | 19 | 20.4 |
| 結　婚 | 5 | 3 | 1 | 9 | 9.7 |
| 病　気 | 0 | 1 | 1 | 2 | 2.2 |
| 出　兵 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1.1 |
| 合　計 | 35 | 39 | 19 | 93 | 100.0 |

次に，転出者と母村集落との関係について聴き取りした結果を示そう。転出者の帰省状況は，「年1～2回」や「数年（3～5年）に1回（ときどき）」がやや多いが，その他の回答も少なくなく，様々である（第4—18）。転出者との連絡状況については「月1～2回（よくある）」が最も多く，7割以上が比較的密に連絡をとりあっている状況にあるようだ（第4—19表）。

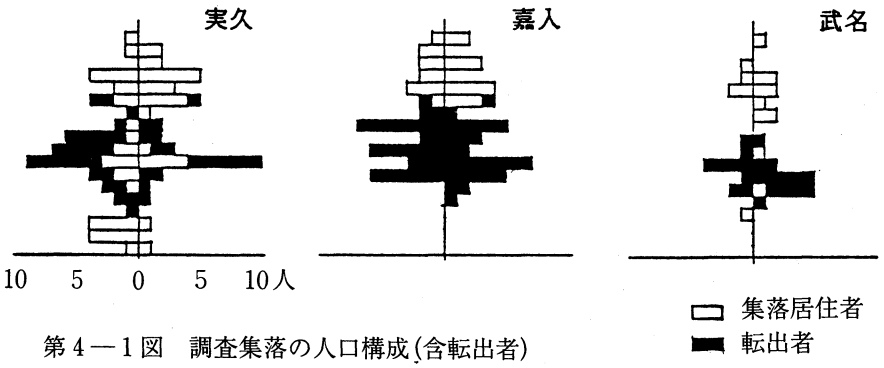
表4—18表　転出者の帰省状況

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 年1～2回(正月，夏休み) | 5 | 11 | 7 | 23 | 30.7 |
| 2～3年に1回 | 5 | 2 | 3 | 10 | 13.3 |
| 数年(3～5年)に1回(ときどき) | 11 | 1 | 4 | 16 | 21.3 |
| 10年に1回(たまに) | 4 | 3 | 4 | 11 | 14.7 |
| それ以上(なかなか帰ってこない) | 4 | 2 | 2 | 8 | 10.7 |
| 帰らない | 2 | 0 | 0 | 2 | 2.7 |
| こちらから行く | 1 | 4 | 0 | 5 | 6.7 |
| 合　　計 | 32 | 23 | 20 | 75 | 100.0 |

表4—19表　転出者の連絡状況

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 週1回(しょっちゅう) | 4 | 3 | 1 | 8 | 17.4 |
| 月1～2回(よくある) | 9 | 9 | 7 | 25 | 54.3 |
| 年数回(ときどき) | 0 | 0 | 3 | 3 | 6.5 |
| 年1回(たまに) | 5 | 0 | 1 | 6 | 13.0 |
| ない | 3 | 0 | 0 | 3 | 6.5 |
| こちらから | 0 | 0 | 1 | 1 | 2.2 |
| 合　　計 | 21 | 12 | 13 | 46 | 100.0 |

最後に，調査集落の人口構成を，調査世帯転出者を含めて図示した（第4—1図)。転出者は調査世帯における世帯主の子供達が主であるから，年齢的にはいずれの集落でも20～50代が多くなっている。ただし，転出者の子供すなわち調査世帯主の孫については全く図示されていない。




第4—1図　調査集落の人口構成(含転出者)

資料：アンケート調査

## 第5節　土地，家屋，墓について

本節では，転出者が転出する際，土地，家屋，墓などをどうしているのかを知るために，調査世帯から，調査世帯の親族[31]について聴き取りした結果を示す。一般に，土地や家屋を売るようなことはほとんどないと言われているが，家については年月がたつとともに自然にこわれてしまうとい

う。第4—20表においても，家を残しているのは16世帯中5世帯（31.3%）にすぎないが，土地については11世帯（68.8%）が転出後も所有している。土地を売り払って出たという話はほとんど聞かないので，サンプル世帯の中にははじめから土地を持たなかった世帯が含まれているのかも知れない。墓については14世帯と90%が残しているが，これは親族が集落に残っている世帯をサンプル世帯としている点を考慮に入れるとむしろ当然かも知れず，逆に，にもかかわらず2世帯で墓を移したことの方が注目される。聴き取りによっても，墓を都会の方に移したという話は必ずしもめずらしくはない。

表4—20表　転出した親族の固定資産，墓の状況

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合計 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| サンプル世帯総数 | 9 | 4 | 3 | 16 | 100.0 |
| 土地を所有している | 6 | 4 | 1 | 11 | 68.8 |
| 家屋を所有している | 4 | 1 | 0 | 5 | 31.3 |
| 墓を残してある | 8 | 4 | 2 | 14 | 87.5 |

表4—21表　調査集落の世帯員数

| | 実久 | 喜入 | 武名 | 合　計 | | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1人 | 8(2) | 8(2) | 2 | 18(4) | 22 | 40.0 |
| 2人 | 8(1) | 8(1) | 4 | 20(2) | 22 | 40.0 |
| 3人 | 2(1) | 0 | 2 | 4(1) | 5 | 9.1 |
| 4人 | 3 | 0 | 0 | 3 | 3 | 5.5 |
| 5人 | 1(1) | 0 | 0 | 1(1) | 2 | 3.6 |
| 6人 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1.8 |
| 合計 | 23(5) | 16(3) | 8 | 47(8) | 55 | 100.0 |

注：（ ）内は調査不能世帯
資料：各集落住民票および聞取り調査

最後に，調査集落の基礎的データの1つとして世帯員数の実態を示しておく（第4—21表）。1人世帯が40%，2人世帯も40%，両者をあわせると80%になり，これらのほとんどが高齢者世帯であって，いわゆる過疎地帯の世帯の代表的な姿がここに示されていると言えよう。なかでも嘉入はその典型である。

## 第5章　おわりに

今回の報告では，戦後における人口流出過程と，その結果として多くの人々が出て行ったあとに残された母村の実態を，母村の側からアプローチした。戦後，とりわけ日本経済のいわゆる高度成長期に，主として関西方面へ，たくさんの奄美出身者が転出し，その結果，母村は年金に依存して生活する高齢者主体の社会に大きく変質した。しかし，転出者との連絡は密であり，彼等の帰村もしばしば行なわれていて，転出者と母村とを切り離して扱うことは適切ではない[32]。

それにしても，奄美の人々の転出は占領下の時期にも行なわれていた事をしばしば耳にしており，郷友会の結成時期が，1)大正末～昭和のはじめ，3)高度成長期後と並んで，2)昭和20年代に結成されたものが多い[33]のも，このことと無関係だと言えないのではなかろうか。占領下における本土への人口移動については，少くとも官庁統計からは全く出て来ないのである[34]。また，戦前の大正末から昭和初期にかけての時期における人口移動についても，この頃結成された郷友会がかなり存在することから見ても，明らかにすべき事柄であろう。

また，母村についても，かつて行なわれていた年中行事等も，我々が調査対象とした集落などではほとんど行なわれていないようであるが，盆や正月にはたくさんの帰郷者を迎えて，集落人口が普段の人口の何倍にもなるといわれるのであるから，こうした事の持つ意味やその及ぼす影響等についても検討すべきであるろう。

しかし，何よりも郷友会そのものの実態をもっと明らかにしなければならない。これについては別稿で扱う予定である[35]。

## 注

1) 奄美では郷友会（ごうゆうかい），関西では一般に郷友会（きょうゆうかい）又は郷土会（きょうどかい）といわれている。その他，郷愛会，平和会，親交会，同心会などもあり，これら以外の特殊な名称をつけている会もある。
2) 字又は部落のことである。
3) 徳州会，沖州会など。ただし，与論島の与州会は連合体ではなく，最小単位である。
4) さらに広範囲のものとしては，外国における日本人会となろう。
5) 同じ市町村レベルの郷友会でも，その下に集落レベルの郷友会のないものと，集落レベルの各郷友会が存在して，その連合体的性格であるものとは，自らちがいがあり，連合体でないものの方がより基本的なものに近いと言えよう。
6) 奄美会は鹿児島県人会の一下部組織ではあるが，県人会の中で，とび抜けて強力であり，他県の県人会並みに扱われている場合もある。例えば，尼崎市にある市立産業郷土会館は，各県から集った人々の憩いの場，交流の場として建設されたものであるが，その設立主体である尼崎各県人会連絡会には16の県人会と同等のレベルで奄美会が参加している。
7) 篠原重則（1974）：村落の共同体的性格と離村形態―四国山地南東部名留川部落の事例―，地理学評論47―1，pp. 41～55。
8) 松本通晴（1971）：都市における「擬制村」の問題―その予備的考察―，評論・社会科学創刊号，pp. 34～58。
9) 上智大学安斎伸教授を代表者とする研究グループの西阿室郷愛会に関する一連の諸報告。
10) 石原昌家（1985）：『郷友会社会―都市のなかのムラ―』ひるぎ社など。
11) 岡橋秀典（1987）：瀬戸内海島嶼部における人口流出と都市の同郷団体，内海文化研究紀要15号，pp. 15～26。
12) 田島康弘（1983）：甑島における過疎化と転出者の集団形成，鹿児島大学教育学部社会科教室編『鹿児島の地域と歴史』，pp. 111～137。
13) 簡単に述べておくと，関西における両者の組織形態において，奄美の場合は集落レベルの郷友会がかなり強力であるのに対し，沖縄の場合は集落レベルのものはそれほど強くなく，県人会レベルの関西における各地域（地区）毎の会の方が主体となっており，こうした違いがおきる原因がどこにあるのかは興味ある問題であると思う。
14) 重信健二郎（1974）：『奄美の人々（関東編）』，全日興信所。
〃　（1976）：『　〃　（関西編）』　〃
藤原南風（1980）：『新奄美史』（上巻），奄美春秋社。
このほか，各郷友会が時々に発行する何周年記念誌の類が非常に参考になる。
15) Abu-Lughod, J (1961)：Migrant Adjustment to City Life：The Egyptian Case, American Journal of Sociology 67, pp. 22～32.
16) 考察の時期は第2次大戦後とくに復帰以後に限定する。郷友会の成立についてみると戦前のものも少なくないが，ほとんどすべてが戦時中にその活動を停止しており，戦後になって再建されている。
17) 聴き取り調査の際，45年の台風を契機にして転出した世帯がかなりあったと聞いた。
18) この土地台帳は現在のものであるが，そこに登場する人物は昭和30年頃の居住者のようである。

19) 武名では，土地台帳は粉失したとの事で，そのかわりのものとして見せていただいたもので，道路清掃等部落の作業を行うときに使用したものである。
20) 当時の武名は漁業集落で，実際にはこの他に約30世帯が漁獲作業のため他集落（須子茂，実久など）から入りこんでいて，全体で70世帯ぐらいが居住していたと言われる（S氏談）。
21) 名簿にある世帯主氏名のうち，嘉入88名中，生存者は14名で74名は故人，武名41名中生存者は10名で31名は故人である。名簿記載者が故人の場合は配偶者を，配偶者も故人の場合は後継者等の現況を調べた。
22) 古仁屋は同じ瀬戸内町内なので，官庁統計では町外の移動である「転出」と区別して「転居」として扱っている。
23) 発行年月は，昭和62年11月である。
24) 1人世帯31，2人世帯131，3人世帯12，4人世帯が1である。
25) 1人世帯11，2人世帯が9である。
26) 発行年月は，昭和61年11月である。
27) このとき，集会場に集ってくれた方々は，集落総戸数の約半分であった。
28) 以前は集落間交通も徒歩であったが，今では道路が舗装され，バスも通っている。大島本島とを結ぶフェリーの開通も1977年である。
29) すなわち，調査世帯に対し，自分の世帯だけでなく親戚，隣人，知人世帯の転出についても聞くことを試みたが，十分な結果が得られなかった。
30) 調査世帯における世帯主の子供達がほとんどである。
31) 調査世帯主の兄弟世帯が主である。
32) 転出者が形成する郷友会が母村に対して行う事として，この他，郷里の諸施設建設の際の募金活動，物品の寄附などがあり，また逆に，母村の方も郷友会に対し，広報の配布や人的派遣を行なったりしている。
33) 関西における郷友会の結成期に関する，筆者が集めた資料の集計による。
34) いわゆる密航である。
35) 本稿は，昭和63年度九州地理学会鹿児島大会（1985年8月25日～26日開催）の口頭発表に加筆・修正を加えたものである。

## 謝　　辞

本研究を行うに当り，瀬戸内町の調査対象集落の皆さん，とくに嘉入の前田シナ子氏，実久の橋口利雄氏，武名の重野良吉氏，光原重則氏に大変お世話になった。また，瀬戸内町企画課および町民課の方々にも資料の点で協力していただいた。調査に際しては，奈良教育大学の村上雅康教授，および鹿児島大学の新地哲郎，都外川尚子，蜂須賀洋一，福元親視（以上，自然地理学），河南泉，佐藤光彦，田島裕三，平田賢司，吉原陸美（以上，人文地理学）の諸君に協力していただいた。さらに，コンピューターによる図の作成に際して，鹿児島大学の三仲啓助教授にもお世話になった。以上の方々に厚く御礼申し上げます。